

日英語の変異性 ——英語変種のつづり字表記と日本語カタカナ表記 の比較分析——

杉 本 豊 久

目次

| | |
|--|-------|
| 0. はじめに | (83) |
| 1. 英語の非標準的つづり字 | (87) |
| 1.1. ピジン・クレオール系のつづり字表現 | (87) |
| 1.1.1. パプア・ニューギニアのトク・ピシン (Tok Pisin) | (87) |
| 1.1.2. ジャマイカン・クレオール (Jamaican Creole) | (93) |
| 1.2. 英語方言系のつづり字 | (96) |
| 1.2.1. グラスゴーでの日常語 | (96) |
| 2. 日本語の非標準的つづり字 (文字) としてのカタカナ表現 | (99) |
| 2.1. 外国語系 (外来語系) カタカナ表記例 | (99) |
| 2.2. 日本語系カタカナ表記例 | (100) |
| 2.3. 「非標準最新系カタカナ表記」の特性とその効果 | (101) |
| 3. 「日本語非標準最新系カタカナ表記」と「非標準英語変種の つづり字」の背後にある共通点と相違点 | (107) |

0. はじめに

現代英語の多様性の一側面として、現在世界各地で使われている様々な英語変種 (Varieties) の音韻とつづり字の表記法についての調査をしてきたが、それらの特徴の背後に日本語のカタカナ表現にも共通した側面があることに気づき、その比較分析を試みた。

これまでの研究の経緯としては、具体的には、世界の英語系ピジン・クレオールの代表的存在である2つの変種、即ちオセアニア地区の代表としてパプア・ニューギニアのトク・ピシン (Tok Pisin) (杉本：2008

a, 2008b, 2009) および西インド諸島と西アフリカ地区の代表としてジャマイカン・クレオール (Jamaican Creole) (杉本: 2008b, 2009) のそれぞれの音韻とつづり字法を取り上げ、その相違点と共通性を分析した。さらに、英語の方言系変種の中でその発音とつづり字法において独自の特徴を持つスコットランド最大の都市グラスゴーでの日常語 (杉本: 2007, 2008c, 2009) の音韻とつづり字法を取り上げ、前述の二つの英語系接触言語との比較を試み、その相違点及びその共通点を検討し、異なる英語の変種間に見られる独自性と普遍性の一端を明らかにした。

それらの特徴のひとつに、音素/k/を表すつづり字<k>の多用がある。この特徴はグラスゴーでの日常語のつづり字法の大きな特徴であり、その他の英語方言やピジン・クレオールにも見られる特徴でもある。¹⁾例えば、人名の Chris を Kris と表記することがある。この Kris というつづりは通常の Chris に比べて、この表記を (例えば、落書きとして) 見たり、(読み物として) 読んだりする者にとって特異な効果を持つ。つまり、「通常とは異なる」というシンボリカルな意味を持つことになる。これは、書き手側の自己主張であり、他のものとは異なるという「独自性」の主張とも解釈できる。このつづり字法が、さらに「従来のつづり字法の慣習に対する抵抗 (resistance)」という社会的意味をもつこともある。例えば、Mark Sebba (2007: 4) は、スペインのカタロニア地方の山岳地帯の町リポリ (Ripoll) で見かけた落書きに、okupación (<ocupación=occupation 「不法占拠」) という表記があることを報告している。このような<k>の使い方はまさに「伝統的なつづり字法に対する意図的逸脱」が「伝統的な社会的慣習の現状に対する抵抗」という社会的意味を持っていることを示している。(杉本: 2009)

パプア・ニューギニアのトク・ピシン、グラスゴーの日常語、さらにはジャマイカン・クレオールにも同様の特徴がつづり字にみられる。もっとも、これらのバラエティーに見られるつづり字<k>の特徴に、カタロニア地方でのスペイン語に見られるような強い社会的意味があるかどうかはやや疑問ではあるが、「従来の (標準英語の) 慣習にとらわれることなく、あくまで実際の発音に忠実なつづり字を志向する」というトク・ピシン全体に共通して見られるつづり字の「合理性」という特徴の一環として捕らえてよいだろう。

ジャマイカン・クレオールにもこの種のつづり字<k>の用法がない

わけではないが、トク・ピシンやグラスゴー方言に見られるほどの頻度と限定的な用法は見られない。つまり、<k>も使われるが、<c><ch><ck>なども同様に高い頻度で使われており、この点で、両者とは異なる。このような相違点の調査・分析が今後の課題ではある。

さて、日本語に見られるカタカナ表記には、1) カタカナ英語系と、2) カタカナ日本語系とがある。前者は英語からの借入語をカタカナ表記したものであり、後者は本来の日本語であり、従来はひらがなや漢字で表記されていたものをあえてカタカナ表記したものである。²⁾ 今回問題とするカタカナ表記は後者のタイプである。カタカナ日本語系を仮に普通名詞、固有名詞、擬態語・擬音語などをカタカナで表記する「標準従来型」と、品詞や単語の境界にとらわれることなくカタカナ表記を柔軟に取り入れたり、ひらがなや漢字と連結させたり、省略形を複合的に取り入れたりする「非標準最新型」とに分けて整理分類して、その一部実例を示すと次のようになる。

1) 標準従来系

i) 普通名詞

ラーメン、ナマで誕生日、ハレの日の着物、15歳中学生にナニが、ゴミ捨てを禁止!、クモ男、クロ猫、とくダネ!、肩コリ、開運のツキ、ニンジン、怒りオヤジ³、洋ラン、ハゲタカ、国語ツボ、エビづくし、ゾウの鼻、大ゲンカ、旬のイカ、ぜひモノ、キャベツを使い切るワザ、等。

ii) 固有名詞

カズの闘志、ウド VS. 梨花、アンパンマン、ピーコが涙、ビートたけし、コブクロ、タミフル、ジャニーズ、マリック超魔術!、ミミカ、ピンゲー、等。

iii) 擬態語・擬音語

スクスク、スッキリ!、朝ズバッ!、キッパリ、大号泣ドッキリ!、脳林寺でポクポクチン、メッタ斬り!、パシャ! 等。

2) 非標準最新系

i) 品詞分解型

エラいところへ嫁いでしまった、N 速ホウ、絶品かもネ、おネエ、めっちゃ×2 イケてる!、あたしんち、ナンだ?、スゴイぞ、ニャンちゅうワールド放送局、世界の果てイッテ Q!、2 時っチャオ! ド

へたカラオケ芸能人、ア然音痴、はねるのトびら、笑ってコラえて、ダメ夫、調べてゴ、等。

ii) ひらがなカタカナ連結型

わんパーク、おはスタ、ナンだ? 英語でしゃべらナイト、とくダネ、ごみタワー、ドラえもん、ポチたま、セレブやせ、ぶっこギ、ゆるナビ、ためしてガッテン、にぎりズシ、等。

iii) 省略型

喰いタン (<食いしん坊探偵)、オビラジ R (<帯番組ラジオ)、ダイバスタ (<お台場スタジオ)、キンスマ (<金曜日スマップ)、クリケイ (<クリスタルケイ)、オリキュン (<オリエンタルラジオ 胸キュン)、なつメロ、等。

iv) 外来語日本語連結型

アドレな! バリバリバリュー、モノイズム、億ション、おはスタ、英語でしゃべらナイト、やじうまプラス、おしゃれイズム、はなまるマーケット、わんパーク、おはスタ、2時っチャオ!、シネ通、等。

(『朝日新聞』テレビ番組表(2007.3.1~7)より)

このようなカタカナ表記を観察すると、特に「非標準最新型」において、その新鮮さ、簡潔性、音感性、ある種の親しみやすさ、分かりやすさ、エネルギーなど、従来のカタカナ表記とは異なる特性が散見され、しかもその随所に、前述の英語変種 (Varieties) のつづり字表記法に共通してみられた「従来の(標準英語の)慣習にとらわれることなく柔軟に、あくまで実際の発音に忠実かつ合理的なつづり字を志向する」という特徴に通ずるものがある。

本稿では、そのような視点に立って、いくつかの代表的な英語変種の音韻とつづり字の表記法と日本語の最近のカタカナ表記とを比較し、その特徴を吟味して、その背後にある心理的特徴やその効果の比較検討を試みる。一見やや乱暴とも見えるこの試みが今後の研究の先駆となれば幸いである。

1. 英語の非標準的つづり字

1.1. ピジン・クレオール系のつづり字表現

1.1.1. パプア・ニューギニアの tok・ピシン (Tok Pisin)

tok・ピシンの音韻の特徴としては、1) 最終子音連結の単純化、2) 母音直後の /r/ 音の欠如、3) 各種子音の単純化 (より多くの子音からより少ない子音への集約)、4) 母音の数 (/i, e, a, o, u/) が少ないための各種母音の単純化、などが挙げられるが、これらの特徴がそのまま tok・ピシンのつづり字法に敏感に反映されている。と同時に、その単純化が発音に忠実なつづり字法に生かされ、実に合理的である。

標準英語に見られる発音とつづり字法の複雑・かつ不合理な関係をとごとく解消し、tok・ピシンの使用者・学習者にとって分かりやすく使いやすいつづり字法が随所に見られる。それは、つづり字を構成する文字の数の減少 (88頁参照)、逆に文字を増やしてまでも発音重視の視点に立ったつづり字法 (次段落参照)、黙字や語尾の <e> の脱落 (「付録2」実例参照)、tok・ピシン独自の発音を反映したつづり字 <k> や <p> の使用 (92頁参照)、などが典型的である。

次の実例は、tok・ピシンの音声に忠実なつづり字法を採用していることが顕著に現れているものを一部列挙したものである。いずれも、tok・ピシンを日常使用している現地の人々の耳に聞こえた音声をもとに、標準英語の母音・子音体系と比較して相対的に少ない数の母音と子音を駆使して構成されたつづり字法であると同時に、大多数の学習者にとってはむしろ習得しやすい「単純」で「合理的」なつづり字法が自然と定着していったものと考えられる。また、「単純」といっても必ずしも文字数の減少を意味するわけではない。たとえば、bihain (<behind) のように、二重母音 /ai/ を示すつづり字 <ai> は、これに相当する標準英語のつづり字 <i> よりも文字数は増えている。つまり、あえて文字数を増やしても、発音により忠実なつづり字を志向するという傾向の表れとみなすことができるのであり、これも tok・ピシンに見られる一種の「合理性」といえよう。

ensel (<angel), Epril (<April), nais (<nice), bikos (<because),

bihain long (<behind long), Baibel (<Bible), lo (<law), braun (<brown), bas (<bus), busnaip (<bush knife), bata (<butter), kanu (<canoe), sutkes (<suitcase), klab (<club), taim (<time), kom (<comb), kamaut (<come out), haitim (<hide=conceal), kaunsila (<councilor), kasen (<cousin), krai (<cry), kap (<cup), kastam (<customs (n.)), kat/katim (<cut), disaipel (<disciple), painim (<find), ai (<eye), raun (<round), daun (<down), draivim (<drive (vb.)), draiva (<driver), drai/draipela (<dry), draibisket (<dry biscuit), das (<dust), es (<east), edukeitim (<educate), inap (<enough), fiftifaiv (<fifty-five), faiv/faipela (<five), plaua (<flour), plaua (<flower), hat/hot/ hotpela (<hot), aua (<hour), hangre (<hungry), hariap (<hurry up), ais (<ice), ain (<iron), ailan (<island), jek (<jack), jem (<jam), Janueri (<January), kilomita (<kilometer), kain (<kind), naip (<knife), fotnait (<fortnight), Fraide (<Friday), parairais (<fried rice), praim (<fry), galen (<gallon), giabokis (<gearbox), Jemeni (<Germany), gel (<girl), go daun (<go down), gut nait (<good night), gavman (<government), graun (<ground), hidden (<heathen), hia (<here), hallans/hailens (<highlands), haiwe (<highway), hani (<honey), etc.

標準英語のつづり字法と比較して、トク・ピシンにおいてはつづり字の「単純化」が目立つ。具体的には、標準英語で4文字でつづる部分が3文字で、3文字でつづる部分が2字あるいは時に1字で、また2字でつづられる部分がしばしば1字で、さらに1文字でつづられていた部分が欠落するなど、総じて文字数が減少しているのが特徴である。

address>adres, cross (=angry)>kros, battery>bateru, bill>bil, boss>bos, bottle>boto, button>baten, cabbage>cabis, carrot>karet, carry>karim; afternoon>apinun, bamboo>mambu, blood>blut, book>buk, brooch>bros, cook>kuk/kukim, firewood>paiawut, four-wheel drive>fowil draiv; anchor>anka, chopsticks>sopstik, back>bek, cock (=penis)>kok, enough>inap, gnat>natnat; again>gen, August>Ogas, beads>bis, beans>bin, because>bikos, captain>

kapten, biscuit>bisket, blue>blu, boat>bot, bread>bret, break>brukim, suitcase>sutkes, road>rot, clean>klin, clean (vb.) >klinim, : law>lo, day>de, Easter>Ista, fortnight>fotnait, girl>gel, work>wokim, butter > bata, kilometer > kilomita, Germany > Jemeni, councilor>kaunsila, ; bright>lait, fortnight>fotnait, eight>et/etpela, good night>gut nait, ; heart>hat, hear>harim, colour>kala, course >kos, court>kot, courthouse>kothaus, gearbox>giabokis, airport>epot, before>bipo, more better>mobeta, fare>fe, four>fo, four wheel>fowil, heart>hat, picture>piksa, house picture>haus piksa ; door>dua, interviewer>intaviua, four>foa, dear>dia, beer>bia, floor>plua, here>hia, flower>plaua, ; comb>kom, island>ailan, knife>naip, hour>aua, iron>ain, etc.

各項目を見れば、いずれも発音に忠実なつづり字を当てていることが明白であるが、特に<2重母音字(異文字)⇒単母音字>、<2重子音字(異文字)⇒単子音字>及び、<3重複合(母・子)音字⇒単母音字>の各パターンにおいて、複数の選択肢を設け、それぞれ音声により忠実な方の母音字を採用していることが顕著に散見され、トク・ピシンのつづり字法の「単純化」がみられ、その背後に「合理性」が伺える。

《音韻とつづり字の各特長の分類》³⁾

- 1) 「最終語尾子音連結 (Final Consonant Clusters)」の単純化：最終子音の「無声音化」、「簡略化」及び「脱落」が見られ、それがつづり字にそのまま反映されている。⁴⁾

Ogas (<August), dentis (<dentist), das (<dust), es (<east), eksosopaip (<exhaust pipe), passim (<fasten), hostes (<hostess), hapkas (<half-cast) ; simen (<cement), Haus Palamen (<House of Parliament), fran (<front), gavman (<government) ; distrik (<district) ; han (<hand), win (<wind), winim (<wind-im=blow), boipren (<boyfriend), daimen (<diamond), raun (<round), ailan (<island), kain (<kind), pren (<friend) ; wel (<wild), welpik (<wild pig), kol (<cold), gol (<gold), holim (<hold) ; bamim (<bamp-im=bump), lam (<

lamp), etc.

- 2) 子音 /l/ が母音化したり脱落し、それがつづり字に反映されている。また、ごく僅かではあるが、標準英語の /r/ が トク・ビシンで /l/ となることがあり、つづり字にその音韻の特徴が反映される。

belo (<bell), orait (<all right), hap (<half), hapkas (<half-cast), hap pas seven (<half past seven), hapim (<halve), etc.

/r/ ⇒ /l/ : <r> ⇒ <l>

laplap (<wrap wrap=colth), tulait (<too bright=very bright), lait (<bright), etc.

- 3) 語頭・語中・語尾の音(節)が脱落することがあり、それがつづり字に反映される。

- i) <語頭の音素・音節>: 語頭のつづり字 <a->, <b->, <e-> などが示す音素や音節が脱落する。

pret (<afraid), gen (<again), long (<along), lait (<bright), lektrik (<electric), gohet (<go ahead), etc.

- ii) <語中の音素・音節>: 語中のつづり字 <-ter->, <-ed->, <-ing->, <-ern->, <-nd->, <-to-> などが示す音素や音節が脱落する。

apinum (<afternoon=evening (early)), parairais (<fried rice), praipan (<frying pan), gavman (<government), hakisip (<handkerchief), hap kaikai bilong asde (<half food belong yesterday), olgeta (<altogether=completely), hapasde (<half yesterday), etc.

- iii) <語尾の音素・音節>: 語尾のつづり字 <-li>, <-ll>, <-be> などが示す音素や音節が脱落する。

bel (<belly), orait (<all right), golo (<globe), etc.

- 4) 子音挿入⁵⁾

hama/hamarim (<hammer),⁶⁾ harim (<hear), haisapim/apim (<high up/up=hoist, lift up), etc.

- 5) 標準英語の「歯間摩擦音 (interdental fricative)」/θ/が、トク・ピシンでは/t/に、また/ð/は/d/、/r/、/s/あるいは/t/などになる。標準英語では/θ/及び/ð/のつづり字は一貫して<th>でつづられるが、トク・ピシンでは<t>、<s>及び<r>でつづられる。

/θ/⇒/t/ : <th>⇒<t>

katolik (<catholic>), saut (<South>), ting/tingting (<think>), etc.

/ð/⇒/d, r, t/ : <th>⇒<d, r, s, t>

/d/ : hidden (<heathen>)

/r/ : narapela (<anotherpela>), arasait (<other side>), etc.

/s/ : klos (<clothes>)

/t/ : ating (<either >), brata (<brother>), etc.

- 6) Post-vocalic /r/の脱落がみられ、それがつづり字に反映されている。⁷⁾

- i) <子音直前 : V_C> : 様々な子音<m, b, s, g, t, n, w, l, k, d>の直前で Post-vocalic/r/の脱落が起こるのであり、直後の子音についての制約はなさそうだ。

epot (<airport>), ami (<army>), baman (<barman>), mobeta (<more better>), kabureta (<carburetor>), kas (<cards>), kago (<cargo>), katen (<carton>), sot (<short>), tanim (<turn>), kon (<corn>), kona (<corner>), kos (<course>), kot (<court>), etc.

- ii) <語尾> : Post-vocalic/r/が脱落したことにより、最終語尾が母音字<a>となるケースが圧倒的に多く、これはトク・ピシンの単語構成上の音響的特徴を印象付けるものであり、トク・ピシンの音韻上の大きな特徴といえ、それがつづり字に反映されている。

akeselareta (<accelerator>), plasta (<adhesive plaster>), alta (<altar>), anka (<anchor>), ba (<bar>), bia (<beer>), mobeta (<more better>), masta (<master>), brata (<brother>), bata (<butter>), calenda (<calendar>), ka (<car>), etc.

- 7) kの多用 : /g/が無声音化して、/k/となり、それがつづり字に反映され<k>となる。これらの音素はそれぞれ調音点・調音方法が

ともに同じで、有声・無声の違いだけであり、有声音の無声音化現象といえる。

/g/⇒/k/ : bek (<bag>), pik (<pig>), welpik (<wild pig>), Koan! (<Go on!>), //kirap/sanap (<get up/sun up=get up>), etc.
cf. beng (<bank>), dring (<drink (n.)>)

一方、/k/を表すのには一貫して、つづり字<k>が用いられ、原則として標準英語の場合のような<c>は用いられない。これはトク・ピシンとしてはきわめて明白なつづり字の特徴であり、掲示、プラカード、看板などでこのつづり字使われているのを見かけると、標準英語のつづり字に慣れきった者（我々）にとっては、視覚的に最も目立つ特徴の一つといえる。

kros (<cross=angry>), kapten (<captain>), bisket (<biscuit>), kabis (<cabbage>), kek (<cake>), kalenda (<calendar>), kamera (<camera>), ken (<can, could>), kandel (<candle>), kanu (<canoe>), ka/kar (<car>), kabureta (<carburetor>), kas (<cards>), kago (<cargo>), etc.

また、標準英語の/k/を示すつづり字<ch>および<ck>が<k>でつづられる。一般に、<ch>⇒<k>は語頭と語中で、<ck>⇒<k>は語中と語尾に現れる。

<ch> : Kristen (<Christian>), krismas (<Christmas>), skul (<school>), anka (<anchor>), etc.

<ck> : baksait (<backside=rear>), bek (<back>), bekbun (<backborne>), kilok (<clock>), bek (<back>), kok (<cock=penis>), aisblok (<iceblock>), jek (<jack>), etc.

その他に、標準英語では、「語尾子音連結 (final consonant cluster)」/ks/が<x>でつづられるが、トク・ピシンでは<kis>あるいは<ks>でつづられる。

<x>⇒<kis, ks> : akis (<axe>), bokis (<box>), piksim (<fix>), giabokis (<gearbox>), seks (<sex>), bokis ais (<box ice=ice chest, refrigerator>), etc.

1.1.2. ジャマイカン・クレオール (Jamaican Creole)

発音に忠実なつづり字法が顕著であり、特に次に紹介するジャマイカン・クレオールの各音韻の特徴がそのままつづり字法に忠実に反映されており、前述のトク・ピシンとの共通点が随所に見られる。具体的には、語尾子音連結の単純化、子音/l/の母音化及び脱落、語頭・語中・語尾での音(節)の脱落と挿入、子音/θ/・/ð/の異音、母音直後の/r/ (Post-vocalic/r/) の脱落、つづり字<k>の多用、などの共通点が顕著である。ただし、これらの諸特徴の具現化については両者に違いがあるので、個々の語彙のつづり字の形態がことごとく一致するというわけではない。

1) 語尾子音連結の単純化がつづり字に反映されている。⁸⁾

accep (<accept), adap (<adapt), ahgus (<August), an (<hand), arres (<arrest), baddis (=badis<baddest), bans (<bands), beas (<beast), behine (<behind), behole (<behold), ben (<bend), bess/bes (<best), bigges/biggis (<biggest), bline (<blind), boas (<boast), etc. cf. grung (<ground)

なお、最終語尾子音連結の「無声音化」、「簡略化」及び「脱落」などの現象は、ある意味では子音連結を避けようとする普遍的現象でもある。

2) 子音/l/、/d/ が母音化したり脱落し、それがつづり字に反映されている。

awrite (<all right), azways (<always), bendung (<bend down), foo/fu (<fool), etc.

なお、音素/l/が半母音/r/になることがあり、それがつづり字に反映される。

direc (<dialect)

3) 語頭・語中・語尾の音(節)が脱落することがあり、それがつづり字に反映される。

i) 語頭

Boat/boht/bout (<about), ca/caa/caw/becaa (<because), catch (<scratch), ceitful (<deceitful), dacta (<conductor), coo/cu/ku (<look), coodeh (<look there), cooyah/cuyah (<look

here, look you), craas/crass/craas (<across), cratch (<scratch), etc.

語頭の音素/h/が脱落することがあり、それがつづり字に反映される。

aaspital (=aspital<hospital), affi (=haffi<have to), ammasi (<have mercy), an (<hand), appie (<happy), ar (<her), arbor (=arbour <harbor), art (<heart), at (<hat), 'at (<hot), av= (ave<have), awa (=hour), ear (<hear), eavy (<heavy), ello (<hello), etc.

つづり字だけが残留するケースもある。

head, healt, heaby, hear, hears, heat, heavy, heet (<eat), hedge, etc.

ただし、単語の最初が母音で始まるときには音素/h/が付加されることがあり、それがつづり字に反映される。

heat (<eat), hask (<ask), heat (<eat), hegg (<egg), hiez /ears/ies (<ears), hile (<oil), heeven (<even), hears (<ears), heetch (<itchy), etc.

ii) 語中

febry (<February)

iii) 語尾

braa/bra/brer (<brother), coulda (<could have), cunny (<cunning), cyai (<carry it), Dadoo! (<Don't do it!), diss/dis (<disrespect), doah/doan (<don't), getti/getty (<get it), gi (<give), gooda (<woulda<would have), ha (<have), haffi (<have to), etc.

4) 語頭や語中に、/k/, /w/, /y/, /t/, /b/, /n/, /g/などの子音が挿入されることがあり、つづり字にそれが反映される。

bunks (<bounce), bwaile/bwile (<boil), bwoy/bwai (<boy), cyar/cyaar (<car), cyane (<cane), deestant/destant (<decent), fambilly/fambly (<family), fishnin (<fishing), foolynish (<foolish), gyaabige (<garbage), gyal/gal (<girl), gyap (<gap), gyarden (<garden); dung (<down); yai (<eye), etc.

5) <th>⇒<dd, d,>, <th>⇒<t>:「有声・歯間・摩擦音」/ð/

が/d/に、「無声・歯間・摩擦音」/θ/が/t/となる傾向があり、それがつづり字に反映される。

/ð/ : adda/ada (<other), aldoah (<although), altogeder (<altogether), anada (=annada=anneda<another), fahda (<father), mada (<mother), badda/bodder (=bada<both), bredda/bredah (<brother), da/dah/a (<that, the), dan (<than), dat (<that), de (<the), dem (<them), den (<then), dese (<these), etc.

/θ/ : authority (<authority), boat (<both), breat (<breath), chute (<truth), claat/cloot/claut/clawt/clot/clout (<cloth), det (<death), earthquake/earthshake (<earthquake), everyting (<everything), faitfull (<faithful), healt (<health), etc.

cf. anutha (<another)

6) Post-vocalic/r/⇒ φ : Non-rhotic である。つまり、card や water などのように、母音直後（あるいは子音直前や語尾）で/r/が発音されず、それがつづり字に反映される。

i) <語尾> : Post-vocalic /r/が脱落したことにより、最終語尾が母音字<a>となるケースが圧倒的に多く、これはトク・ピシンの場合と同様に、ジャマイカン・クレオール単語構成上の音響的特徴を印象付けるものでもあり、それがつづり字に反映されている。

afta (<after), anda (=unda<under), anywhe (<anywhere), fahda (<father), mada (<mother), badda (=bada<both), benta (<venture), betta (<better), bigga (<bigger), cabba (<cover), cella (<celler), chatta (<chatter), chokey (<choker), rubbas (<rubbers), coodeh (<look there), cooyah (<look here), etc.

cf. betteration (<better)

ii) <子音直前> : V_C : 様々な子音<d, k, n, f, ch, s>の直前で Post-vocalic/r/の脱落が起こるのであり、直後の子音についての制約はなさそうだ。

aftawud (<afterward), baak (<bark), baan (<burn), bad wud

(<bad word), tun bad (<turn bad), ban (<burn), boad (<board), bood/bud (<bird), buttafly (<butterfly), caad (<card), caan (<corn), cawd (<cord), chuch (<church), ditty/doti (<dirty), etc.

- 7) kの多用：音素/t/が同じ調音法（閉止音系）の/k/となることがあり、それがつづり字に反映され<t>⇒<k>となる。

bokkle/bokl (<bottle), genkly (<gently), etc.

cf. cangle (<candle), hangle (<handle), etc.

1.2. 英語方言系のつづり字

1.2.1. グラスゴーでの日常語⁹⁾

グラスゴーの人々の日常語はゲール語やスコッツ語などの影響がありやや複雑だが、Aitken (1984) が言うように、スコッツ語とスコットランド英語とを両極に配置した「言語連続体 (language continuum)」を設定し、スコットランドで話されている様々な英語系言語変種をこの連続体のどこかに位置づけるというのが妥当だとすれば、グラスゴーの日常語もこの中に位置づけられることになる。したがって、その音素の数や分布及び調音法については、英国における他の非標準英語の場合と同じように、基本的に標準スコットランド英語のものを基盤として考えてよい。

語尾子音連結、特に、語尾子音連結の単純化、子音/l/の母音化及び脱落、語頭・語中・語尾での音（節）の脱落と挿入、つづり字<k>の多用などは前述の変種、トク・ピシン、ジャマイカン・クレオールと共通の音韻的特徴であり、それがつづり字に反映されているが、子音/θ/・ð/の異音については若干の相違があるし、母音直後の/r/ (Post-vocalic/r/) については「弾音 (tap)」[ɾ] や「接近音 (approximant)」[ɹ] として具現化されるという点で前者とはまったく異なる。

- 1) 語尾子音連結<母音+/nt/>および<母音+/rt/>の単純化、つまりこの種の子音連結/-nt/, /-rt/の最終子音/t/が声門閉鎖音/?/で代用されたり、脱落したりする。¹⁰⁾

senting /sentiŋ/⇒/sen ? n/⇒/sen/, wanting/wantiŋ/⇒/wa: ? n/⇒

/wa:n/, don't know /dant no/⇒/da ? no/⇒/dano/, etc.

この種の特徴は、実は語尾子音連結を回避して、つまり<子音+子音>の配列をさけ、<子音+母音>の配列を作ろうとする傾向の現われかもしれない。というのも、語尾子音連結<母音+/nt/>および<母音+/rt/>の結合形においては、語尾の/t/が声門閉鎖音/?/で代用され、さらにその直前の/n/や/r/が脱落して、二段階の単純化がみられたわけだが、その結果として語尾子音連結の配列形態が回避されたともいえるからである。また、このような解釈の妥当性を支持する現象がほかにも見られる。<rl><rm><lm><rn>などの語尾子音連結に見られる「語中音挿入 (epenthesis)」である。これは語尾子音連結の間に母音を挿入することによって子音連結を回避している現象であり、例えば, girl, arm, film, torn, などの発音が、それぞれ [gɪrʌt], [ɛrʌm], [fɪtʌm], [tɔrʌn] となり、子音連結が解消されている。

ただし、トク・ピシンやジャマイカン・クレオールに比較的頻繁に見られた、その他の語尾子音連結の単純化（最終子音の脱落）を反映するつづり字が意外と少なく、これがプラスゴーの日常語のつづり字の大きな特徴と言えなくもない。

- 2) 音素/l/が「軟口蓋化 (velarized)」あるいは「母音化 (vocalized)」して、「暗い (dark) /l/ : [ɫ]」となり、それがつづり字に反映されることがある。¹¹⁾

《語尾》: a'/aa/aw (=all), ara/ a-raw (=at all), ba/baw (=ball), etc.
《子音直前》: ayeways (=always), bawface (=ballface), baw-hair (=ball-hair), bawheid (=ball head), baws<balls=testicles), haud (=hold), etc.

- 3) 語頭、語中、語尾などにおいて単語の一部（子音・音節）が脱落することがあり、それがつづり字に反映される。

um (=him), dundy money (=redundancy money); caunle (=candle), tummlle (=tumble), haunbaw (=handball), hauf (=half), haud (=hold); fun (=found), gaun (=going, go on), granda (=grandfather), granma (=grandmother), grun (=ground), wae (=wall), getting (=getting), wi (=with), bree (=brother), etc.

- 4) 語中、語尾において単語の一部に子音や音節が挿入されることがあり、それがつづり字に反映される。

Shuggy / Shug (= Hugh), shuge (= huge), Zliz (= Liz : Elizabeth), tumshie (=turnip); twicet (=twice), wanst (=once), etc.

- 5) 歯間摩擦音 /θ/ 及び /ð/ はそれぞれ /h/ や /d/ で代用されたり、前後の母音や直後の音への同化現象を起こし、それがつづり字に反映されることがある。¹²⁾

/θ/ : brother [bɪʌɾɾɾ], mother (mʌɾɾɾ), that (ɾä·ʔ), father [fe·ɾɜ], there [ɾɜə], etc.

/ð/ : hanks (=thanks), hing (=thing), somhin (=something), everyhin (=everything), nuhin (=nothing), anyhin (=anything), hink (=think), etc.

- 6) 母音直後の /r/ (Post-vocalic/r/) が発音され、特に母音間では「弾音 (tap)」[ɾ]¹³⁾ や「接近音 (approximant)」[ɹ]¹⁴⁾ などになる。¹⁵⁾ つづり字 <r> はそのまま残留し、標準英語と同じつづり字が使われることが多い。

《語尾》: after, bar, brammer, motor, yer, for, air, fur, sure, wur (=our), merr (=come here), etc.

《子音直前》: start, first, mustard, birlin, kerds, arm, arse, parsley, beardie (=a bearded man), etc.

《母音間》: furrít, horror, in one's baries, barra (=barrow), the berries, morra (=tomorrow), etc.

以上取り上げたつづり字に見られる諸特徴は、3つの英語系変種に共通して見られるものが中心であるが、その共通する背景として、いずれも多民族によるたび重なる言語接触というプロセスを経ていること、そして共通する大きな特徴として、つづり字法が標準英語の伝統にとらわれることなく、実際の日常語の発音に極めて忠実だということを指摘できる。さらに、その特徴の背後には、それらの根幹をなす「単純化」とその「合理性」が窺える。

2. 日本語の非標準的つづり字(文字)としての カタカナ表現¹⁶⁾

前述のように、カタカナ表現には、外国語からの借入語をカタカナ表記した「外国語系（外来語系）カタカナ表記」とそれ以外の、元来は日本語であるのに（したがって通常はひらがなや漢字で表記されるのに）あえてカタカナ表記される「日本語系カタカナ表記」¹⁷⁾とに大きく分類できる。前者をさらに主流を占める「英語系（普通名詞、固有名詞、形容詞、動詞、句表現、等）」とその他の「外国語系」に、そして後者を「標準従来系（普通名詞、固有名詞、擬態語・擬音語）」と「非標準最新系（複合型：ひらがなカタカナ連結型、省略型、外来語日本語連結型、等）」とに分け、それぞれの具体例を収集した。収集した資料は、『朝日新聞』のテレビ番組欄（2007年3月1日～7日）からのものである。

2.1. 外国語系（外来語系）カタカナ表記例

2.1.1. 英語系

2.1.1.1. 普通名詞

スポーツ、ニュース、ストレッチ、マジック、アクション、ビジネス、タクシー、ドラマ、レストラン、サウンド、コメディ、等。

2.1.1.2. 固有名詞

ニューヨーク、フランス、パリス・ヒルトン、ソフトバンク、ワイルドワンズ、アルツハイマー、クック諸島、等。

2.1.1.3. 形容詞

ユニーク教材、ホームレス生活、アンビリバボー、土曜ワイド劇場、ミラクル結婚、グッド、ホットホット美女トーク、等。

2.1.1.4. 動詞

スピーク、セレクト、若い美女をゲット、ハッスル、等。

2.1.1.5. 句表現

クローズアップ現代、ニュースウォッチ9、地球データマップ、ライフスタイル、ズームイン SUPER、リアルタイム、スーパーニュース、奇跡ラブストーリー、スーパーモーニング、ドラマチックメーク等。

2.1.1.6. 句表現（省略型）

デジカメ新機能、チンパンニュース、モーサテ（＝モーニングサテライト）、スポバラ、Jナビ、プロレス、高級エステ、スポ魂、脳トレ超魔術、感動エンタ、チャイナビ、ベリサタ！、スマステ！、揚水がアポなしで乱入、スタメン、デパ地下、ワンセグ放送、コラボ、デジ、等。

2.1.2. 他の外国語系（フランス語・韓国朝鮮語・スペイン語・等）

湖畔プチ旅、春グルメ、丸秘レシピ、松坂デビュー、Mルージュ；ハングル、ソウ・スンホン、パク・シネ、ソンジュの旅立ち；フラメンコ、アラビア、のだめカンタービレ、ヨガ、サファリ、テノール、春色パスタ、星5つカルボナーラ、等。

2.2. 日本語系カタカナ表記例

2.2.1. 標準従来系

2.2.1.1. 普通名詞

ラーメン、ナマで誕生日、ハレの日の着物、15歳中学生にナニが、ゴミ捨てを禁止！、クモ男、クロ猫、とくダネ！、肩コリ、開運のツキ、ニンジン、怒りオヤジ3、洋ラン、ハゲタカ、国語ツボ、エビづくし、ゾウの鼻、大ゲンカ、旬のイカ、ぜひモノ、キャベツを使い切るワザ、等。

2.2.1.2. 固有名詞

カズの闘志、ウドVS梨花、アンパンマン、ピーコが涙、ビートたけし、コブクロ、タミフル、ジャニーズ、マリック超魔術！、等。

2.2.1.3. 擬態語・擬音語

スクスク、スッキリ！、朝ズバッ！、キッパリ、大号泣ドッキリ！、脳林寺でボクボクチン、メッタ斬り！、パシヤ！、等。

2.2.2. 非標準最新系

エラいところへ嫁いでしまった、N速ホウ、絶品かもネ、おネエ、めちゃ×2イケてる！、あたしんち、ナンだ？、スゴイぞ、ニャンちゅうワールド放送局、世界の果てイッテQ！、2時っチャオ！、ドヘたカラオケ芸能人、ア然音痴、はねるのトビら、笑ってコラえて、ダメ夫、調べてゴ、等。

2.2.2.1. 複合型

2.2.2.1.1. ひらがな・カタカナ連結型

わんパーク、おはスタ、ナンだ？英語でしゃべらナイト、とくダネ、ごみタワー、ドラえもん、ポチたま、セレブやせ、ぶっこギ、ゆるナビ、ためしてガッテン、にぎりズシ、等。

2.2.2.1.2. 省略型

喰いタン（＜食いしん坊探偵）、オビラジR（＜帯番組ラジオ）、ダイバスタ（＜お台場スタジオ）、キンスマ（＜金曜日スマップ）、クリケイ（＜クリスタルケイ）、オリキュン（＜オリエンタルラジオ胸キュン）、なつメロ、等。

2.2.2.1.3. 外来語・日本語連結型

アドレな！、バリバリバリュー、モノイズム、億ション、おはスタ、英語でしゃべらナイト、やじうまプラス、おしゃれイズム、はなまるマーケット、わんパーク、おはスタ、2時っちゃオ！、シネ通、等。

（『朝日新聞』テレビ番組表（2007.3.1～7）より）

2.3 「非標準最新系カタカタ表記」の特性とその効果

日本語系カタカナ表記のうち、特に「非標準最新系」に属するカタカナ表記例を中心に、学生を対象としたアンケート調査を一部参考にして、その特性とその効果を分析し次にまとめた。あえて「非標準最新系」を選んだ理由は、この種のカタカナ表記が、前述の3つの英語系変種のつづり字の背後にある心理的特性に共通すると見られる特徴をより多く備えていると思ったからである。

《特性》：《効果》

1) 強調性：注目・インパクトを与える効果

ひらがなと漢字だけの表記にカタカナが入ると、それだけでインパクトを与えることになり、そのために強調効果が生ずる。例えば「メッタ斬り」では、ひらがなを使った「めった斬り」よりもすごく鮮やかな、あるいは豪快な斬り方をしそうで迫力があるし、「キャベツを使い切るワザ」では、普通の技ではなく、もっと特別で、今まで聞いたこともないスゴイ技なのではないかと思わせる効果がある。さらに「エライとこ

ろに嫁いでしまった」の「エラ」はひらがなで「えっらい」ところというように'気持ちが入る'気がして、やはり強調の効果がある（学生A）。また、この種の表現は、強調によって人目を引きつける効果があるので、特にそのような機能を必要とする「テレビ番組欄」などには打って付けといえよう。

【類例】

ドヘたカラオケ芸能人、メッタ斬り！、15歳中学生にナニが、ナンだ？、スゴイぞ、ぜひモノ、ア然音痴、開運のツキ、国語ツボ、顔よりデカイ仰天フライ、ここがヘン、森三中ヤバすぎ？、我が家のイチ押し井、ボロもうけ、等。

2) 簡潔性・明晰性・省略型：平易さ・分かり易さの効果、記憶に残りやすいという効果

例えば、ブラックマヨネーズ、アンジャッシュ、オリエンタルラジオなどは、インパクトのある芸人の名前ではあるが、速いペースの日常会話で発音するのには長すぎるので、それぞれ「ブラマヨ」、「アンジャ」、「オリラジ」のように短く簡潔な表現に変えることにより、インパクトや分かりやすさ（記憶に残りやすいこと）を維持しながら、会話での運用性や歯切れの良さを高めるという効果がある。また、「ハゲタカ」、「洋ラン」、「大ゲンカ」などのように、仮にこれらを漢字で表記すると、「禿鷹」、「洋蘭」、「大喧嘩」などのように、複雑すぎて難度が高くなるので、カタカナ表記を使うことにより簡潔性・明晰性を強調し、平易さ・分かり易さという効果を出すことが出来る（学生B）。

【類例】

クモ男（蜘蛛男）、クロ猫（黒猫）、肩コリ（肩凝り）、開運のツキ（付き）、ニンジン（人参）、怒りオヤジ3（怒り親父3）、国語ツボ（壺）、エビづくし（海老/蝦尽くし）、旬のイカ（烏賊）、シネ通（シネマ通）、ハレの日の着物（晴れの日の着物）、ゴミ捨てを禁止（塵捨てを禁止）、ゾウの鼻（象の鼻）、キャベツを使い切るワザ（技）、カズの闘志（三浦和良の闘志）、ウドVS.梨花、ピーコが涙、ビートたけし、コブクロ、ナンだ？（何だ？）、ア然音痴（啞然音痴）、はねるのトビら（扉）、笑ってコラえて（笑って堪えて）、ダメ夫（駄目夫）、調べてゴ、にぎりズシ（握り寿司）、モツ鍋（臓物鍋）、突然のクビ宣言！（突然の首宣

言！)、モテない田舎高校生 (持てない田舎高校生)、ラーメン (拉麺/老麺)、ここがヘン (変)、ぜひモノ (是非物)、危険なアネキ (姉貴)、旬のぷりぷり松葉ガニ (松葉蟹)、D のゲキジョー (劇場・激情)、年収6億で壮絶イジメ (虐め/苛め)、キク！みる！ (聞く！見る！)、極上トロ、女たちの背徳のツボ (壺)、雪の宿で女将と大モメ (揉め)、スケバン (助番)、かわいいネコ特集 (猫特集)、紙とハサミのご用意を (紙と鋏/剪みのご用意を)、カエルがいなくなる (蛙がいなくなる)、親や教師にも言えないワケ (訳)、五つ目のチカイ (誓)、祐ちゃんマー君卒業、核のゴミに揺れる町 (核の芥/塵に揺れる町)、巨大人食いサメを狙え (巨大人食い鮫を狙え)、クマ乱入 (熊乱入)、桑名の焼きハマグリ (蛤)、参院も豪華宿舎のナゼ (何故)、春新作ケータイ特集、チューボー (厨房)、トマトとタコ (トマトと蛸)、ワカサギ (公魚)、知的冒険ハッケン!! (知的冒険発見!!)、無添加食品のワナ (罟)、関根勉に娘がダメ出し (駄目出し)、モノマネ芸 (物真似芸)、金属ドロ (金属泥)、マグロが消える (鮪が消える)、42歳のナゾ (謎)、家族結ぶイチゴ園 (苺園)、? 串刺し不死身オヤジ (親父)、車VS無謀なオバさん (小母さん)、? 電線ドロ感電宙づり (? 電線泥感電宙吊り)、テキトーTV (適当TV)、ダメ女 (駄目女)、コレイチ、アタマの体操決定版 (頭の体操決定版)、パンダが警告、豪快アワビ無料 (豪快鮑/鰓無料)、政治とカネ (金)、マジ涙南キャン、ア然 (啞然)、真相報道バンキシャ! (真相報道番記者)、黒バラ (黒薔薇)、ニセ良純出現 (偽/贋良純出現)、ガキの使い (餓鬼の使い)、カラダ (体)、腸内から体をキレイに! (綺麗に!)、ボロもうけ (檻樓儲け)、華麗なるブタ (豚)、超キレイ好き珍獣、世界最大サンゴに危機、ガキ大将 (餓鬼大将)、華麗なるケチ生活、激ウマ列島、マジ説教、逆ギレ (逆切れ)、ココが巧、牛肉デカ飯、オンチ克服 (音痴克服)、家康がホレ込んだ名刀 (家康が惚れ込んだ名刀)、決断のウラ側、スレ違い (擦れ違い)、過激イタズラ初公開だ、怪物ヘビ (怪物蛇)、高橋英樹が大ハマりの家事とは、完ペキ収納、ダンナ (旦那)、今週ヤマ場、寒ブリ直送、肉汁ジュワリ餃子、アナタ、愛されますか…!? (貴方、愛されますか!?)、夫婦像にズレ…、金属ドロボー (泥棒)、等。

3) 新鮮性・現代性、エネルギー・爽快性：ホップな可愛らしさや、

元気な表現をもたらす効果

カタカナのもつ視覚的イメージ、即ちシャープで新鮮さを感じさせる効果が、ひらがなと漢字だけの文章の中では際立ち、新しい心理的效果が生まれる。例えば「N 速ホウ」では、一部カタカナを入れることで新鮮さが増し、とっつき易く、読む者に興味を抱かせるエネルギーを持つことになる。また、略字やカタカナそのものが現代風で爽快なイメージを伝える効果がある（学生 C）。テレビ番組表は本来、視聴者（特に若者）に対し、新鮮さを前面に出すことにより、より流行を意識しているのであり、カタカナ表記を多用すること自体が、このような流行や現代性を先取りしようとの意図が見えてくる。

【類例】

ハレの日の着物、怒りオヤジ、アンパンマン、オリキュン、ぶっコギ、ポチたま、ゆるナビ、ダイバスタ、クリケイ、アドレな！、モノイズム、英語でしゃべらナイト、わんパーク、ミミカ、バケルノ、アンジャ、ブラマヨ、2 時っチャオ！、ここがヘン、危険なアネキ、五つ目のチカイ、真相報道バンキシャ！、知的冒険ハッケン、チューボー、体をキレイに、逆ギレ、完ベキ、D のゲキジョー、参院も豪華宿舎のナゼ、絶品かもネ、あたしんち、朝ズバッ！、めっちゃ×2 イケてる！、スゴイぞ、おネエ、アンタ殺してワタシも死ぬ、夢キラリ、等。

- 4) 音響性・音感性、気軽性・親密性：口語的で会話の雰囲気を出す効果、とっつき易く肩のこらない雰囲気を出す効果

例えば、「絶品かもネ」の「ネ」だけを、また「あたしんち」の「ン」だけをカタカナ表記とすることにより、音響性・音感性を連想させ、より口語的で会話の雰囲気をかもし出す効果がある。また、「とくダネ！」や「朝ズバッ！」などは、報道番組の堅苦しいイメージを和らげ、気軽な肩のこらない雰囲気を出し、芸能・暮らしなどのバラエティー番組感覚で政治や経済の問題を報道してくれそうなイメージ作りの効果がある（学生 D）。

【類例】

カッコイイ、2 時っチャオ！、怒りオヤジ、（擬態語・擬音語系）、スクスク、スッキリ！、キッパリ、大号泣ドッキリ！、脳林寺でポクポクチン、メッタ斬り！、パシャ！、絶品かもネ、おネエ、めっちゃ×2 イケ

てる！、ナンだ？、スゴイぞ、ためしてガッテン、危険なアネキ、Dのゲキジョー、キク！みる！、極上トロ、オススメ、アンタ殺してワタシも死ぬ、夢キラリ、テキトーTV、コレイチ、アタマの体操、肉汁たっぷり極上肉まん、ウチくる！？、ココが巧、牛肉デカ飯、オススメッ、トコトン、アンコ椿春の香り、にぎりズシ圧巻ズラリ、国語ツボ、ぜひモノ、アンパンマン、テキトーTV、コレイチ、モノコト進化論、ココが巧、等。

5) 欧米性・洋風：欧米文化への憧れ効果

外来語（それも、主として英語）をもじったカタカナ表現の背後には、外国、それも欧米文化への志向性・根強い憧憬を彷彿させる。

【類例】

おしゃれイズム、モノイズム、シネ通、バリバリバリュー、タミフル、ジャニーズ、マリック超魔術！、アドレな！、バリバリバリュー、モノイズム、億ション、おはスタ、英語でしゃべらナイト、やじうまプラス、おしゃれイズム、はなまるマーケット、わんパーク、2時っチャオ！、シネ通、等。

6) 多義性・ギャグ性：ことばの遊び効果（古文の掛詞の伝統）

例えば、「とく（得）ダネ！」は「得だね！」と「特種」の二つの意味を、「2時っチャオ！」は「2時に見ちゃおう」と「（2時っ）チャオ！：イタリア語由来の挨拶で“ヤッホー！”」の二つの意味を、また「わんパーク」は「腕白」と「わんわんパーク」の二つの意味を含意しているというように、一瞬のうちに複合的なイメージを連想できると同時に、インパクトもそれだけ強くなる。さらにこの用法は、古文に見られる「掛詞（かけことば）」の手法に通じるという点で、日本文化の伝統を受け継いでいると同時に、現代の若者のギャグ文化と見事にマッチしているといえよう。

【類例】

英語でしゃべらナイト、笑ってコラえて、世界の果てイッテQ！、アンパンマン、脳林寺でポクポクチン、ニャンちゅうワールド放送局（猫とネズミ）、とくダネ、ドラえもん、Dのゲキジョー（劇場/激情）、等。

7) 弁別性・区別性：ひらがなや漢字表記との違いをもたらす効果

例えば、「エライところに嫁いでしまった」の「エライ」は漢字の「偉い」が表すプラス（肯定的な）イメージではなく、「程度がはなばなしくひどい」、つまり「えらく大変そうな家へ嫁いでしまった」というマイナス（否定的な）イメージを持たせるためにカタカナにしてその違いを「区別・弁別」する効果がある（学生 E）。

【類例】

ポチたま（犬と猫の区別）、エライところへ嫁いでしまった、ニャンちゅうワールド放送局（猫とネズミの区別）、世界の果てイッテ Q!、2 時っちゃオ!、キク! みる!、アンタ殺してワタシも死ぬ、政治とカネ、モノコト進化論、等。

8) バランス性：メリハリ効果

例えば、「めちゃ×2 イケてる」の場合、「めちゃめちゃいけてる」とひらがなのみで表記したのでは、ひらがなだけの文字数が多くて見た目がぱっとせず、しかもひらがなの丸っこい字体が締まりのない印象を与える。そこでこのように、「×2」という記号と数字を入れることによりアクセント（メリハリ）が付き、さらにカタカナを盛り込むことによりカタカナの持つ角々した感じがしっかりした印象を与え、漢字の硬さ・難解さもなく、全体としてひらがな・記号・数字・カタカナで軽妙かつ爽快なバランスを保っている。また、最後の「イケてる」も「イケテル」のようにカタカナだけだと、「テル」に目が行ってしまい、バランスがカタカナに偏るので、それを避けて「イケてる」とすることにより、絶妙なバランスが保たれている（学生 F）。

【類例】

ハレの日の着物、ぜびモノ、キャベツを使い切るワザ、ビートたけし、N 速ホウ、ニャンちゅうワールド放送局、ドヘたカラオケ芸能人、ア然音痴、あたしんち、絶品かもネ、ゾウの赤ちゃん、ハニカミ、ぜびモノ、旬のぷりぷり松葉ガニ、年収 6 億で壮絶イジメ、極上トロ、女たちの背徳のツボ、かわいいネコ特集、超モテ猫の謎、旅館の子ネコ物語、紙とハサミのご用意を、カエルがいなくなる、核のゴミに揺れる町、巨大人食いサメを狙え、新歴史ウラ偉人伝、アンタ殺してワタシも死ぬ、雑穀でキレイに、春新作ケータイ特集、ぜびモノ、知的冒険ハッケン!!、

無添加食品のワナ、肉汁タップリ極上肉まん、政治とカネ、真相報道バンキシャ、華麗なるブタ、モノコト進化論、ウチくる！？、焼きラーメンが登場、華麗なるケチ生活、激ウマ列島、マジ説教、逆ギレ、ココが巧、牛肉デカ飯、決断のウラ側、スレ違い、過激イタズラ初公開だ、完ペキ収納、妻 VS.おネエ、今週ヤマ場、寒ブリ直送、等。

3. 「日本語非標準最新系カタカナ表記」と「非標準英語変種のつづり字」の背後にある共通点と相違点

本稿の目的の一つは、英語の三つの非標準変種、具体的には二つの「英語系接触言語（ピジン・クレオール）」パプア・ニューギニアのトク・ピシンと、西インド諸島のジャマイカン・クレオール、そして英語方言系であるグラスゴーの日常語にみられる非標準的のつづり字の共通した特徴とその背後に窺える心理的効果が、日本語のつづり字の一形態としてのカタカナ表記、それも最近顕著に見られる非標準的な日本語系カタカナ表記の特徴とその心理的効果に相通ずるものがあることを具体的に示すことにある。そこで、上述の日本語非標準最新系カタカナ表記にみられる各特徴と心理的効果を抽出し、それに対応する非標準英語系変種のつづり字にみられる特徴と心理的効果との比較検討を試み、その結果を次にまとめた。

《非標準最新系カタカナ表記》 《非標準英語変種のつづり字》

- | | |
|--------------------|----------------|
| 1) 強調・注目・インパクト | 自己主張・独自性・反骨精神 |
| 2) 簡潔性（明晰性）・分かりやすさ | 単純性・合理性・発音に忠実 |
| 3) 新鮮さ・現代性、気軽性・親密性 | 斬新性・流行性 |
| 4) 視覚性・音感性、口語的 | 発音に忠実・合理性 |
| 5) 弁別性・ひらがなや漢字との違い | 標準的のつづりとの区別 |
| 6) 洋風・外国（欧米）への憧れ | ？ |
| 7) 多義性・ギャグ性・ことばの遊び | ？・ユーモア性、ことばの遊び |
| 8) バランス性・メリハリ効果 | ？ |

この結果、1) 両者の間に共通する特徴がかなり見られること。2) 両者を比較し、日本語のカタカナ表現の特徴やその心理的効果の複雑性と多様性が際立つこと。3) 各項目に重複性が見られ、単一の特徴が複数の心理的効果に及んでいること。4) 両者の特徴に（特に英語系非標準変種のつづり字に顕著に）それぞれ規則性と一貫性が見られること、

などが明らかになった。

二つの選択肢があって、片方がより権威を持つ標準形、他方が非公式な逸脱形と一般にみなされているときに、あえて逸脱形を選択するというその背後に潜む心理的特徴に共通性、つまり普遍性がある。各種英語の非標準的つづり字（例えば、<k>）に見られる合理性（発音に忠実であり、分かり易い）と反骨精神あるいは自己主張の心理は、日本語の非標準最新系のカタカナ表記にも共通したものがある。

非標準最新系カタカナ表記については、歴史的にみれば、従来文章の中ではあくまで補助的な役割しか果たしてこなかったカタカナ表記であり、だからこそ文章（文脈）の中で際立って見え、そのためにある種のエネルギーを発することが出来るといえる。この傾向は今後更进一步に進み、より多様な用法が予測されるが、ある限界に達したとき、おそらく今度はそのエネルギーが衰え、カタカナ表記が本来もつ効果を失うことになるかもしれない。また、日本語のカタカナ表記の特徴や心理的効果の項目数の方がより多いのは、ひらがな・漢字・カタカナという複雑かつ多様な表現形式を持つ日本語ならではの特徴といえよう。

非標準英語変種のつづり字については、アルファベットの数の制約もあり、日本語に比べて表現の多様性という点ではるかに選択肢の数が少ない。日本語の場合のように三種類の体系（ひらがな・漢字・カタカナ）を使い分けたり、それらを複合的に使用したりすることなどは出来ず、標準英語のつづり字の規則性にメスを入れることが数少ない主要な選択肢の一つである。逆に、それだけに一つ一つの文字の選択の持つ意味や効果が大きいともいえる。そして何よりも、それぞれの変種のつづり字に共通の規則性が見られるということに注目したい。英語系接触言語であるピジン、クレオールとスコットランドの地域変種であるグラスゴーの日常語という比較的關係の薄いと思われる英語系変種同士にこれほどの類似性が認められるということと、日本語と英語というまったく系統的に疎遠な言語のつづり字の形態に見られる類似性はある種の普遍性を彷彿させる。一見乱暴とも見えるこのような比較分析研究が、実は新たな研究分野の開拓と新たな発見への道を開いてくれるものと考える。

注

- 1) トク・ピシン、ジャマイカン・クレオール、グラスゴーの日常語におけ

る、音素/k/を表すつづり字<k>の多用例を次に挙げる。

i) トク・ピシン

Kristen (=Christian), Kriskas (=Christmas), skul (=school), anka (=anchor), bek (=back), bekbun (=backborne), baksait (=backside : 'rear'), kilok (=clock), kok (=cock : 'penis'), kom (=comb), sopstik (=chopsticks), kala (=colour), kot (=court), bikos (=because), bisket (=biscuit), sutkes (=suitcase), kos (=course), aisklok (=iceblock), jek (=jack), kik (=kick), ka (=car), kabureta (=carburetor), kas (=cards), kago (=cargo), katen (=carton), kampa (computer), kon (=corn), kona (=corner), kaunsila (=councilor), kukamba (=cucumber), lektrik (=electric), etc.

・/g/⇒/k/ : bek (<bag>), pik (<pig>), welpik (<wild pig>), koan ! (<go on !>), kirap (<get up>), dok (=dog), kol (=cold), distrik (=district), hapkas (=half-cast), akeselareta (=accelerator), etc.

・/x/⇒/k/ : giabokis (=gearbox), akis (=axe), bokis (=box), piksim (=fix), seks (=sex), bokis ais (=box ice), eksospaip (=exhaust pipe), etc.

cf. kain (=kind), kis (=kiss), hakisip (=handkerchief), calenda (=calendar), kilomita (=kilometer), buksop (=bookshop), kisen (=kitchen), pok (=fork), cabis (=cabbage) ; beng (=bank), dring (=drink), etc.

ii) ジャマイカン・クレオール : <k>以外に、<c><ch><ck>なども同様に高い頻度で使用される。

Actoba (=October), actapuss (=octopus), becaa/ca/caw/kawz (=because), caal/kaal (=call), can/carn/kawn (=corn), cack (=cock), carrat (=carrot), catch (=scratch), katch/detch/kyatch (=catch), cawd (=cord), cawfee (=coffee), coh (=cow), cotch/kotch (=lean on), crasses (=crisis), cleat/cloot/claut/clawt/clot/clout (=cloth), kulcha (=culture), cap/kyap (=cap), kyat (=cat), etc.

iii) グラスゴーの日常語

choklit (=chocolate), kin (=can), yuzkin (=you can), yezkin (=you can), praktikly (=practically) Suckie (=Sauchiehall Street), skoosh (=squash : 'any fizzy soft drink'), kerry-oot (=take away), dooket (=dovecote), kerds (=cards) ; canny (=can't), cargo (=carry-out), cerd [kerd] (=card), coal, colour, coffin, etc.

2) 外来語以外でカタカナ表記されるものを「特殊カタカナ語」と表記することがある。最近その分類や効果が分析されつつある。日本語の表記体系の中で、より効果的な運用のための一手段であり、この種の用法が今後増加することが予想される。

3) 杉本 (2008a, 2008b, 2009) を参照。

4) 語尾子音連結の単純化は、トク・ピシンだけの特徴ではなく、「米国黒

人英語 (African American Vernacular English)」、世界各地のビジン・クレオール、グラスゴー方言を初めとする英国各地の地域方言、などにも頻繁に見られる音声の特徴である。特に、動詞の語尾子音連結における最終子音 /t/ や /d/ の脱落は、英語の過去時制を示す接尾辞 <-ed> の発音の脱落を意味し、動詞の語尾屈折の形態に混乱をもたらすことにもなる。

- 5) 子音が挿入されることにより、母音連結 <V+V> を回避し、<C+V> という規則性が維持され则认为することができる。
- 6) 「挿入の r (Intrusive r)」という現象で、hama に接尾辞 -im が付加され、hama-im となると母音が重なることになるため、それを防ぐために、子音の r が間に挿入され、<C+V> の規則性を維持しようとする現象と解釈できる。次例の harim, haisapim も同様の現象と見られる。(杉本: 2008a)
- 7) 「母音直後の /r/ (Post-vocalic/r/)」の脱落も、語尾子音連結の単純化と同様に、必ずしもトク・ピシンだけの特徴ではない。英米の各地域によって、この音素 /r/ を発音する方言地域と発音しない方言地域とがある。米国南部や米国黒人英語などは一般に発音しないし、標準的イギリス英語の発音あるいは「容認発音 (Received Pronunciation)」などでもこの /r/ を発音しない。(杉本: 2008a)
- 8) 杉本 (2008b, 2009) を参照。
- 9) 杉本 (2007, 2008c, 2009) を参照。
- 10) 一般に、語尾子音連結 (Final Consonant Clusters) の最終語尾子音が脱落する現象は、米国黒人英語や世界各地の英語系ビジン・クレオールに数多く見られる。例えば、first, second, left, port, sent などの語尾子音連結 -st, -nd, -ft, -rt, -nt の最終子音の /t/ や /d/ が脱落して、つづり字法としては firs', secon', lef', por', sen' のように表記される。
- 11) 標準英語においては、音素 /l/ は「明るい (clear) l [l̥]」と「暗い (dark) l [ɫ]」のつの異音を持つ。「明るい l」は、舌先が歯茎に触れると同時に前舌面が硬口蓋の方向に盛り上がる。つまり、前方母音を発音するときに似ていて、前舌面と硬口蓋の間隔は、次に続く母音に影響される。一方、「暗い l」は、口舌面が軟口蓋の方向に盛り上がり、後方母音 (例えば /u/) を発するときと似ていて、下の中央部が下がり窪んだ状態となる。一般に、「明るい l」は、例えば like, left, million などのように、語頭、母音直前、/j/ 直前などに現れ、「暗い l」は、例えば milk, old, bell などのように、子音の前や語末の位置に現れる。
- 12) これらの有声・無声歯間摩擦音 /ð/, /θ/ については、世界各地に見られる非標準英語の様々な変種に共通して見られる幾つかの変異形をグラスゴー方言も持っているのだが、有声音と無声音とではその変異のパターンがやや異なるようだ。例えば米国黒人英語をはじめとして、世界中の英語系のビジンやクレオールに共通して見られるように、有声音 /ð/ については語

頭では/d/で代用され、無声音/θ/については語頭では/t/で代用される傾向が強い。また前後の言語環境の影響を受け、同化現象を起こすことが多い。ところがグラスゴーでの日常語では必ずしもそうではなさそうだ。

- 13) 「弾音 (flap)」ともいわれる。Flap は舌尖を歯茎付近に向けてはじく音をさす場合と、上歯に押さえられた下唇をはじくように開放する音をさす場合とがあるが、今問題となっている音は前者のそれである。具体的には、標準英語の音素/r/の発音のように、/ɑ/音を出しながら、下の先端を後部歯茎に向かって後方にそらすのではなく、逆に下を前方にぱたりと倒して音を出す。日本語の音素/r/は「ラ、リ、ル、レ、ロ」に関係し、一種の「弾音 (flapped)」/r/といえる。舌尖を弾く回数は一回のみの場合と複数回の場合とがある。
- 14) 調音器官を閉じずに発音する音素/w/, /y/, /r/, /l/, などの子音のことで、調音器官が摩擦を生じない程度に接近することから「接近音 (approximant)」の名称がついた。
- 15) また、強調されて「震え音 (trill)」/r/となることもあるが、グラスゴーのような都会での話し言葉では、強調の際以外ではあまり現れない。グラスゴーでは、この「母音直後の (Post-vocalic)」/r/が威信形と見做されており、一般により保守的な傾向を示す女性たちの発音に定着しているようだが、これに対する反動的傾向として、この種の/r/を脱落させる現象が、主として労働者階級の男性たちの間に見られる。この「母音直後の (Post-vocalic)」/r/の欠如あるいは「削除 (deletion)」は、一種の「母音化 (Vocalisation)」あるいは、「咽頭音の母音的文節音 (pharyngeal vocalic segment)」と分析することもできる。
- 16) 本来、日本語における借入語のうち、漢語とそれ以前の借入語を除いたものを「外来語」とし、主に西洋諸言語からの借用であるため、「洋語」と呼ばれたり、カタカナ語表記することが多いことから、「カタカナ語」とも呼ばれるが、本稿では、基本的にカタカナで表記されるものをすべて「カタカナ語 (表記)」とし、その上で本文で述べているように、「外国語系 (外来語系) カタカナ表記」と「日本語系カタカナ表記」の二つに大きく分類した。テクニカルコミュニケーター協会 (カタカナ表記検討ワーキンググループ) では、「内閣告示第二号『外来語の表記』(平成3年6月28日策定)」の規格に基づき、2008年3月に「外来語 (カタカナ) 表記ガイドライン第2版」を作成し、「一般の使用者が直接、見る、聞く商品上に表記されるカタカナで表記される外来語」についての指標を提示している。本規定では、「外来語を日本語として表記するために使用するカタカナでの表現を「カタカナ表記」と定義し、すでにひらがな、または漢字で表記されている用語を目立たせるだけの目的でカタカナで表現する場合はカタカナ表記から除いている。(例:「ネジをしめる」)

17) 新聞や雑誌などの報道機関では、カタカナ表記の使い方についての共通のルールがある。具体的には、1) 外国人名・地名（中国・朝鮮を除く）などの固有名詞、2) 外来語 3) 感動表現で特に強調する場合、4) 擬声語・擬音語（ひらがなも可）、5) 擬態語でニュアンスを出したい場合、6) 俗語・隠語、7) 学術用語、8) 動植物名などである。また、このほかに、常用漢字表や新聞協会が決めた漢字語以外の漢字はひらがなで書くように指示されているようだが、新聞社によっては「ニュアンスを出すため」や「出るクイは打たれる」のように、「ひらがな文中での埋没を避けるため」に、適宜カタカナを使うこともあるようだ。つまり、カタカナ表記が、外来語だけでなく、ことばを効果的に伝えるための一方法としても使われているといえよう。

ちなみに、「外来語（カタカナ）表記ガイドライン第2版」（テクニカルコミュニケーター協会編）策定の際に参考にした各メディアが規定する表記ルールとして、挙げられている文献を次に挙げる。

1. 社団法人共同通信社『記者ハンドブック第9版』（株）共同通信社 2002年。
2. 社団法人共同通信社『記者ハンドブック第10版』（株）共同通信社 2006年。
3. 新聞用語懇談会『新聞用語集』日本新聞協会 1996年。
4. 朝日新聞社用語幹事『最新版 朝日新聞の用語の手引』朝日新聞社 2002年。
5. 毎日新聞社『毎日新聞 用語集』毎日新聞社 2002年。
6. 読売新聞社『読売新聞 用字用語の手引』中央公論新社 2005年。
7. NHK放送文化研究所『NHK ことばのハンドブック第2版』日本放送出版協会 2005年。
8. NHK放送文化研究所『NHK 日本語発音アクセント辞典（新版）』日本放送出版協会 1998年。
9. 石渡敏雄『基本外来語辞典』東京堂出版 1990年。
10. 三省堂編修所『官公庁のカタカナ語辞典 第2版』三省堂 1998年。
11. イミダス編集部『Imidas 現代人のカタカナ語欧文略語辞典』集英社 2006年。
12. 松村明『大辞林 第二版』三省堂 1995年。
13. 日本規格協会『JIS 工業用語大辞典 第5版』日本規格協会 2001年。

◎本研究は成城大学特別研究助成金「現代英語の合理性と普遍性に関する実証的研究」の助成を受けており、ここに記して謝意を表する。また、アンケート調査に協力してくれた成城大学文芸学部 of 学生諸君、特に杉本ゼミの諸君に深く感謝したい。

参考文献

- Aitken, A.J. 1984. 'Scots and English in Scotland.' In P. Trudgill (ed.), *Language in the British Isles*. Cambridge : CUP, 94-114
- Arends, Jacques, Pieter Muysken and Norval Smith. eds. 1995. *Pidgins and Creoles : An Introduction*. Amsterdam : John Benjamins Publishing Company.
- Davies, Diane. 2005. *Varieties of Modern English : An Introduction*. Harlow : Pearson Education Limited.
- Gorlach, Manfred. 1991. *Englishes : Studies in Varieties of English 1984-1988. Varieties of English Around the World*. Amsterdam : John Benjamins Publishing Company.
- Holm, John. 2000. *An Introduction to Pidgins and Creoles*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Macafee, Caroline. 1983. *Varieties of English Around the World : Glasgow*. Amsterdam : John Benjamins Publishing Company.
- Munro, Michael. 1985. *The Patter : A Guide to Current Glasgow Usage*. Glasgow : Glasgow District Libraries.
- . 1988. *The Patter : Another Blast*. Edinburgh : Canongate Publishing Limited.
- . 2001. *The Complete Patter*. Edinburgh : Birlinn Limited.
- Sebba, Mark. 2007. *Spelling and Society : The Culture and Politics of Orthography around the World*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Smith, Larry E. and Michael L. Forman. 1997. *World Englishes 2000. Literary Studies East and West*. Honolulu : University of Hawai'i.
- Wells, J. C. 1982. *Accents of English*, vols I-III. Cambridge : CUP.
- 池田雅之、矢野安剛編 (2006) 『ヨーロッパ世界のことばと文化』成文堂。
- 河原俊昭、山本忠行編 (2004) 『多言語社会がやってきた』くろしお出版。
- 森本幸代 (2006) 『バトワ単語帖』Mighty Mules' Bookstore。
- 杉本豊久 (1985) 「ピジンとは何か、クレオールとは何か」『言語』Vol.14, No. 11 大修館。
- . (1992) 「接触言語の変容 (Ⅱ) —ジャマイカン・イングリッシュのライフサイクル—」『成城文藝』第138号。
- . (2001) 「爆発する英語 : グローバル英語の時代」『英語教育』Vol.50, No.2 大修館
- . (2006) 「スコットランドにおける言語事情とグラスゴウのゲール語教育」『成城文藝』第196号。
- . (2007) 「グラスゴウ方言—その音韻・つづり字法・語彙—」『成城文藝』第200号。

- . (2008a) 「Tok Pisin のつづり字法・語彙・句表現—その単純化と合理性—」『成城イングリッシュモノグラフ』第40号。
- . (2008b) 「世界のピジン・クレオール英語—言語接触の諸相—」矢野安剛・池田雅之編『英語世界のことばと文化』成文堂 263-285頁。
- . (2008c) 「スコットランドの言語事情とグラスゴー方言」矢野安剛・池田雅之編『英語世界のことばと文化』成文堂 207-230頁。
- . (2009) 「現代英語の変異性—トク・ピシン、ジャマイカン・クレオールおよびグラスゴー方言の音韻とつづり字の比較—(1)」『成城大学共通教育論集』第1号
- テクニカルコミュニケーション協会.(2008)『外来語(カタカナ)表記ガイドライン 第2版』テクニカルコミュニケーション協会(Japan Technical Communicators Association)

【付録：1】英語のつづり字の変異性：「音素/k/を表すつづり字<k>の多用」

1. トク・ピシン

Kristen (=Christian), Krismas (=Christmas), skul (=school), anka (=anchor), bek (=back), bekbun (=backbone), baksait (=backside : 'rear'), kilok (=clock), kok (=cock : 'penis'), kom (=comb), sopstik (=chopsticks), kala (=colour), kot (=court), bikos (=because), bisket (=biscuit), sutkes (=suitcase), kos (=course), aisblok (=iceblock), jek (=jack), kik (=kick), ka (=car), kabureta (=carburetor), kas (=cards), kago (=cargo), katen (=carton), kamputa (=computer), kon (=corn), kona (=corner), kaunsila (=councilor), kukamba (=cucumber), lektrik (=electric), etc.

/g/⇒/k/ : bek (<bag>), pik (<pig>), welpik (<wild pig>), koan ! (<go on ! >), kirap (<get up>), dok (=dog), kol (=cold), distrik (=district), hapkas (=half-cast), akeselareta (=accelerator), etc.

/x/⇒/kis, ks/ : giabokis (=gearbox), akis (=axe), bokis (=box), piksim (=fix), seks (=sex), bokis ais (=box ice), eksospaip (=exhaust pipe), etc.

cf. kain (=kind), kis (=kiss), hakisip (=handkerchief), calenda (=calendar), kilomita (=kilometer), buksop (=bookshop), kisen (=kitchen), pok (=fork), .cabis (=cabbage) ; beng (=bank), dring (=drink), etc.

2. ジャマイカン・クレオール : <k>以外に、<c><ch><ck>なども高い頻度で使用。

Actoba (=October), actapuss (=octopus), becaa/ca/caw/kawz (=because), caal/kaal (=call), can/carn/kawn (=corn), cack (=cock), carrat (=carrot), catch (=scratch), katch/detch/kyatch (=catch), cawd (=cord), cawfee (=coffee), coh (=cow), cotch/kotch (=lean on), crasses (=crisis), cleat /clood/claut/clawt/clot/clout (=cloth), kulcha (=culture), cap/kyap (=cap),

kyat (=cat), etc.

3. グラスゴーの日常語

choklit (=chocolate), kin (=can), yuzkin (=you can), yezkin (=you can), praktiklly (=practically) Suckie (=Sauchiehall Street), skoosh (=squash: any fizzy soft drink'), kerry-oot (=take away), dooket (=dovecote), kerds (=cards); canny (=can't), cargo (=carry-out), cerd [kerd] (=card), coal, colour, coffin, etc.

【付録：2】 トク・ピシン

ensel (<angel), Epril (<April), nais (<nice), bikos (<because), bihain long (<behind), Baibel (<Bible), lo (<law), braun (<brown), bas (<bus), busnaip (<bush knife), bata (<butter), kanu (<canoe), sutkes (<suitcase), klab (<club), taim (<time), kom (<comb), kamaut (<come out), haitim (<hide=conceal), kaunsila (<councilor), kasen (<cousin), krai (<cry), kap (<cup), kastam (<customs (n.)), kat/katim (<cut), disaipel (<disciple), painim (<find), ai (<eye), raun (<round), daun (<down), draivim (<drive (vb.)), draiva (<driver), drai/draipela (<dry), draibisket (<dry biscuit), das (<dust), es (<east), edukeitim (<educate), inap (<enough), fiftifaiv (<fifty-five), fiftifaiv (<fifty-five), faiv/faipela (<five), plaua (<flour), plaua (<flower), //hat/hot/hotpela (<hot), aua (<hour), hangre (<hungry), hariap (<hurry up), ais (<ice), ain (<iron), ailan (<island), jek (<jack), jem (<jam), Janueri (<January), kilomita (<kilometer), kain (<kind), naip (<knife), fotnait (<fortnight), Fraide (<Friday), parairais (<fried rice), praim (<fry), galen (<gallon), giabokis (<gearbox), Jemeni (<Germany), gel (<girl), go daun (<go down), gut nait (<good night), gavman (<government), graun (<ground), hidden (<heathen), ain (<iron), hia (<here), haitim (<hide), hallans/hailens (<highlands), haiwe (<highway), hani (<honey), etc.

【付録：3】 グラスゴー日常語

choklit (=chocolate), yuzkin (=you can), yezkin (=you can), praktiklly (=practically) Suckie (=Sauchiehall Street), skoosh (=squash: any fizzy soft drink'), kerry-oot (=take away), dooket (=dovecote),; walliz (=wallies: 'false teeth'), cawz (=caws: 'sweeps'), palz (=pals 'friends'), ez (=he's), shizz (=she's), bristulz (=bristols: 'titties'), tottiz (=totties: 'potatoes'), dizny (=doesn't), yeez (=yous: plural of you),; unuff (=enough), nuhin (=nothing), murra (=mother), furra (=for), luvli (=lovely), dug (=dog),; buld (=build), durty (=dirty), luvin (=living), thurd (=third), wull (=will),; aipl (=apple), bettr (=better), fukn (=fucking), litl (=little),; hurtit (=hurted), beltit

(=belted), wastit (=wasted), fittit (=fitted), startit (=started), teltit (=told), knittit (=knitted), bee-heidit (=bee-headed) heart-roastit (=heart-roasted), kilt (=killed), corrie-fistit (=corrie-fisted: 'left-handed'), ; wirrawalliz (=wi the wallies), wirrapalz (=wi the pals), wirraheid (=wi the heid), wirraboadi (=wi the body), shizzasmashur (=she's a smasher), furrawean (=for the baby), tennafags (=a ten of fags), pirrit oanaslata (=put it on account), orrabest (=all the best), orratime (=all the time), whissup (=what's up), furryi (=for you), ; ya, ye (=you), -nae, -ny (=not: willny, urny, couldny, wouldny, cannae), nae-, noa- (=no-: naebdy, noabdy), ; um (=him), dundy money (=redundancy money) ; caunle (=candle), granma (=grandmother), ganda (=grandfather), tummle (=tumble), haunbaw (=handball), hauf (=half), haud (=hold) ; fun (=found), gaun (=going, go on), granda (=grandfather), granma (=grandmother), grun (=ground), wae (=wall), getting (=getting), wi (=with), bree (=brother), ; tumshie (=turnip) ; twicet (=twice), wanst (=once), ; <-y 型> amny (=am not), baldy, bevvy (=alcoholic drink or a single drink or a session of drinking), bogey (=a child's cart), canny (=can't, cannot), clarty, dizny (=doesn't, does not), doowally (=an idiot), dunny (=the area below the common stair in a tenement building), emdy (=enybody), eppy (=epileptic fit), evrubdy (=everybody), folly/foley (=fellow), gauny (=going to), hairy, inky (=a felt-tip pen), jakey (=a down-and-out, especially one who obviously drinks lots of jake, methylated spirits), janny (=a janitor in a school), jobby, laldy, lavvy (=a toilet, shortened from lavatory), malky, mammy, plooky, puggy, rammy, riddy, sanny (=sandshoe), scooby, shady, specky (=a spectacle-wearing person), stookey, swally (=swallow), toley, totty (=potato), urny (=aren't), voddy (=vodka), wacky baccy (=marijuana), willny (=will not, won't), ; <-ies 型> backie, baggie, bahookie, beardie, binnie, bonnie, bowfies, Buckie, cattie (=catalogue), chiefie, cludgie, doobie, Home Ekies (=Home Economics), geggie, guties, heidie, hudgie, hughie, icy/icie (=ice-cream van), ex/exie (=excellent), joggies, keelie, keepie-uppie, lassie, loosie, moothie, nippy sweetie, oves, photie, schemie, stooshie, Suckie, tumshie, wallies, ; <-er 型> beamer, belter, blooter, bummer, chanter, dauner, dinger, falsers, fizzer, grave-nudger, greaser, jotters, keeker, low-flyer, lumber, ower, patter, peevers, shitters, skitter, wanner, etc.

【付録：4】 ジャマイカン・クレオール

accep (<accept), adap (<adapt), ahgus (<August), an (<hand), arres (<arrest), baddis (=badis<baddest), bans (<bands), beas (<beast), behine (<behind), behole (<behold), ben (<bend), bess/bes (<best), bigges/biggis (<biggest), bline (<blind), boas (<boast), etc. cf. grung (<

ground),; awrite (<all right), azways (<always), bendung(<bend down), foo/fu (<fool), etc.; boat/boht/bout (<about), ca/caa/caw/becaa (<because), catch (<scratch), ceitful (<deceitful), dacta (<conductor), coo/cu/ku (<look), coodeh (<look there), cooyah/cuyah (<look here, look you), craas/crass/craas (<across), cratch (<scratch), etc.; aaspital (=aspital <hospital), affi (=haffi<have to), ammasi (<have mercy), an (<hand), appie (<happy), ar (<her), arbor (=arbour<harbor), art (<heart), at (<hat), 'at (<hot), av= (ave<have), awa (=hour), ear (<hear), eavy (<heavy), ello (<hello), etc.; febry (<February) ; braa/bra/brer (<brother), coulda (<could have), cunny (<cunning), cyai (<carry it), Dadooi! (<don't do it!), diss/dis (<disrespect), doah/doan (<don't), getti/getty (<get it), Gi (<give), gooda (<woulda<would have), ha (<have), haffi (<have to), etc.; bunks (<bounce), bwaile/bwile (<boil), bwoy/bwai (<boy), cyar/cyaar (<car), cyane (<cane), deestant/destant (<decent), fambilly/fambly (<family), fishnin (<fishing), foolynish (<foolish), gyaabige (<garbage), gyal/gal (<girl), gyap (<gap), gyarden (<garden) ; dung (<down) ; yai (<eye), etc.; adda/ada (<other), aldoah (<although), altogeder (<altogether), anada (=annada=anneda<another), fahda (<father), mada (<mother), badda/bodder (=bada<bother), breda/bredah (<brother), cloze (<clothe), da/dah/a (<that, the), dan (<than), dat (<that), de (<the), dem (<them), den (<then), dese (<these), etc.; authority (<authority), boat (<both), breat (<breath), chute (<truth), claat/cloot/claut/clawt/clot/clout (<cloth), det (<death), eartquake/earthshake (<earthquake), everyting (<everything), faitfull (<faithful), healt (<health), etc. cf. anutha (<another),; afta (<after), Anda (=unda<under), anywhe (<anywhere), fahda (<father), mada (<mother), badda (=bada<bother), benta (<venture), betta (<better), bigga (<bigger), cabba (<cover), cella (<celler), chatta (<chatter), chokey (<choker), rubbas (<rubbers), coodeh (<look there), cooyah (<look here), etc. cf. betteration (<better),; bokkle/bokl (<bottle), genkly (<gently), etc. cf. Cangle (<candle), hangle (<handle), etc.; appricilove (=appreci+ate (hate) ⇒appreci+love), fashionist, facialist, fretration, frightenation (=fright), haul'n' (<hold on (=don't)), politricks (=politics+trick), politrickster/ polytrickster (=politic+trickster), etc.